十論為奔抄

372

ナ論ゐ辨却　終

第八段

渡部　和編

中昔以上　梅まるに中昔以上とゝ或とゝ武家の人くとゝいひ或とゝ公家道の人とゝ云ふ一ゝとゝ
ぬとゝゐの本とゝいひあふとゝ云ふとゝ武家
云ゝ住ゝの間ゐ住ゝ住ゝ住ゝ住ゝ住ゝ住ゝ
まるゝ町人百姓ゝ云ゝ栄耀の家ゝ住ゝ
家業とゝまるゝ面くの貢加ゝ弼ゝ天皇の
ゝとゝ云ゝ十雲盤の指ゝ御ゝの爪ゝ
鎌の柄ゝ斧柄ゝ云ゝ和ゝ連ゝ立ゝ
て鼻ゝの久ゝ色ゝ言ゝ

なれとて子し未来記に云のゝ興に於詩に立於
礼成に於樂に民可使由之不可使知之とゝ今の意
よりあれい禁中に和尚の連句のゝ理世安民の
ことゝてゝ殿上のことゝあれい僧家に朝夕
暮誦のごとく衣冠とあゝもれ僕とゝ為て天神
地祇とやうけむとゝもゝい和尚も異抵もて
大事の称ふれい庶民いあゝてゝ
おとゝあへい子游ごとゝ孫子の美名ちゝへゝ
まして妻舞の仁美とゝこゝりひ所ゝ
行之とゝ由之とゝ脩己以敬とゝ子道の人此
信とゝ法あゝ仏の辯の大略い是後おゝ偏ゝ
民由の章此子曰を衍文とて由之とゝ前の詩礼

楽あゝ仏と米行を由北理ゝてゝ
ゝゝゝゝゝゝ何の
中最以下　遺稿夜話ゝある日本曹寺の茶話
又故義のゝゝ人ゝあゝて仏偈とゝ何のゝゝ
向ゝに俗談事話とゝるゝあゝと云ゝ
ゝゝのゝゝて道の教ゝ仏ゝれゝ儒の教然
不動とゝい仏家の寂滅ゝ云ゝい仏語の
ゝゝゝゝゝゝゝゝい道と中不以下ゝゝて
中不以下の風雅と導ゝ秋ゝるゝ女ゝ歳の
とゝゝて阿含ゝ人とゝゝあゝいのゝ内秘外
ゝあゝ所ゝんゝ内ゝて世ゝの名用
とゝゝゝゝ子而正達知我者其天乎

さへ但溺うとくして非をあらひて強いて人をも世をもさまたげまどろ名聲善惡の日用あれを女子童蒙ともに学ばしたれと王道を上達をむとありいさぎよくして強乃氏のかうるの恩愛ともをそこれを乱世あれへ論語の言行と鎧うてよ家いたの廛実をあるべし教誡をたの表裏とあるをへ花ろへ公道をあるをしいろむけれと柳下惠とをあるを人のこと踏と称とやうい道を家くのをこれをふんとを孟子張ら神をとるをへをとちをとあるとちらに中於行しうたのくちを柿を人をもを人像の武と

作をを俗諧の道の才一を俗談平語のし詔ありけをを故義の談笑ををこれの迷訓いあををあんに例のををををををを今ちをちをれ入作をを成を家くのを作をを言語不到のをあんに学にけををのを作をを辭をを乱を入をもをををかんれをを雅易のををををををれて甚次のををを傳ををのを学ををををを俗諧の言をを恥をを

洛陽風土　遺稿後諧をむを媛城の屠柿舎を

あををを俗諧をにををを蕉門の稀をを

をあををををにををを蕉門の稀をを

京のをを地をあをををををををををを

一一六振のからくりよりもやうに山茶のからくりの句をつくれる句をもつて例の似而非なんけねよ
ゑ支の人あつてんの孫をうとぼひたくて聞もて
素堂ヤラカ句をもて似せをもて今日の平俗ちるをもとをもつ
はつて蕉柿舎の詩中にあつて若茶の名
録に入れしをも

作意　遺稿類説に一ゑ仔加ゑの西林庵にあつて
繊猛五義の撰集あるに武蔵のくくりに
春句とあつれをもて中に其角もこれ幸あつて
秋風辞と載へる句に所手にあるものをもつて
いてつふとをもて人も感ずてこれのよりの
及かくまるとをもてねる例のあるふるに書ふる

けるの似せとをもへり王振金砂の作とりとあつて
天下の人と称るをもをそるをもをそるを幸の変化と
をもつて二作とかくれ平の話と先いへ作
かくれの似せを作をもて先ずい自己と先へ
とかくいて幸に遷化あるに諸や幸の変と
をもつてくあくの作とかくて

三作　いそ月やゆ新眼図のかくに

三作　懐紙もの牡丹
いかに焦尾ちをもつて上吟とをもふ佳ふるに彼ら
春句とあつて曲節の論あり尋意いをもつ
をもつて句作の用とをもつ

雅俗　雅俗といふ意の設あり或を頼政の方北

論語に衰ら雅ら通ら俗あり衰れると意の
雅俗とつい或ら肥て累くるしくて上扁の
いつる俗語ちるに癒て浮ーけあり又雅言
あり衰と詞の雅俗とは十段の辨に云へ

傳曰

乎人貴語　梅ちるに貴語の子い十論一部の
大ちのあんちる詞ちる傳ちも作ちもあやちる不
い方ちに貴とちて一段に尾とちる故
故あり貴ち黄八金の用に似てそちて人と
ちくあへそちて人とおとあり尋ち認ちと
認ちとのいしもちるに今の貴語と乎人
の貴ちと天地に通ち愚人の貴い一分に

そきく天地ちと人理とに正しの好悪あるあり
謂に付二子の大ゆちん論ちも云に勝ちくき
辨ちい貴ち貴ち乎ちとちく一ーちて付改めやさ
い家語の始誅に仲由向曰君子禍至不懼福
至不喜今夫子得位而喜何也云孔子の答
い今の詞あり差ち事の解に云ーちて仲由い
虚実の実ちとちて顔色の喜怒ちくるる
にれちと例の隠ちてちあくもちのちと云へ
のちりちと論語の述而い扁に二子以我為
隠乎吾無隠乎爾吾無行而不與二子
者是丘也云先後ちいしより論語の行者達
い道ちい無隠ちとつ世に高のちあらい

一子相傳の秘訣あんれいの道を天下に天
何とぞ聞きて一たびこれを
い論語の文章を園のみちあんちゝに二子
と云ふ所を孔子の論語の相異のごと
千位とわたくしたるもれ
れんかの七箇の喜怒哀樂も何とて無思
かいらあんたれと思ひ思ふて思ふ
眼横鼻直ちんとやたをくれのみ七十二弟
和漢に我方の論語あり論語は此段とらく
あ〳〵人はむかひて陽貨と人あり新たに
かつて孔子と新たかくもまたと新の年をあ
りてたれと思ふことなく畢竟

意と調ふかうりてかくとの陽貨とあり
れよりとまよく陳司敗に向て昭公の不禮
とかつて孔子陽
こ皇の帝いまもて夫子のこゝあんを言よ
是丘の自慢とたちむ一は陽貨の論よりて
て女子與小人為難養也近之則不孫遠之
則怨と云ふ小人を例の常説として言ふ女子
の為用とこゝろ
あまれよりこれ
朱注に君子之於臣妾慈以愛之則無二
心惠以義之則易使

夫さいはてよりつくし蒼ひの人へ女よりといよく
不孝なる故よりこれを拒のうらはのてあく陽
かなりての歎息あるん事書きれ妻の不孝を作て
妬よ播磨盤陳のことくく中ほと義盤陳のことく
絶よ仰頂陳の言葉ときくもれに近く
おろう悪とこらをい立遠くうむたことを色欲つ
いやしくして国雎の行ようく陳平氏よりと
ちとを地妻人賢人もかとりてあつらひのもも
ちとされ言語の辭ようて女子の詩論を尚
ふれ和とかとて世ふ世ようて貴ま男女の
天性をきく俗情の世ふぬちんとをもて人倫
のあさやく拙を陽をのかとうしこの

の尉とかうて事をとのれ言ふ人ひとく
も辭をて一をを俗諺の言語の言行をあん
言行違　世評を遺稿の五秘あれ十論をを
世ひとれいかくて秘をてきてあるを
ちて稿の遺誡ふ秘後ふ人ありて十論と
薄をむに言行の詩と一部の実節ふて道く
の違ふ百世の真慶とあへしけ行とい
九又條も條貫の博をちはをを屋宴の
言ふて世ふを名利の用あれいをを天ふを
違をいい人ふ劣ふををれをを俗諺
の世ふて諫臣爭ふの喻ふ天下の一助
をんをふちをむ一の誹讃、師に

の事は仁よりして史記に訕謗の中懷と失へ
ばかりなるべきなり放逸の人は結のねしさる
ばかりやもされい公儀にて誹謗止の沙汰に
もなるべしなんとかくの如くなる風雅
の元祖とありて沙汰に成連歌の人々これを誹謗
の詞にて下賤の座にしてあるべきなり利
よりとらん遺恨あるべしやはりて今の俳諧
以貴下人にしてこれよの言語を稽にはなして儒
仰の人の謂とはして詩歌の人は勝とくらん
淮陰侯は勇氣なおろしも孟之反の厳なる俳諧
なりとよまんの地にして道くの達をこの徒と
はなるべしてあるべしこれは学者のなるべ

扨て天倫の次第ありて沙汰に連俳とあるべきなり
言書と詩歌の風論に及びて連歌を沙汰
の優劣に及びて俳諧の事語ることの家の
徒に及ばれい言と百世の迷誠にて分のりひ
と言れされども沙汰に言ひの違にて作家にて
分の意の説あるべしいまおのおの分に
あるべきかとや儒家にたれと大ひて
過行とは言のうりけ及て俳諧とかの聖人の
なれとは愚老の沙汰のなりいとなるべしいて我家の
俳文にひとれい学者と行のなるべし尤俳
の然々文とある一しりけりや言りの文の節なる
れてもけ行とは一人かよて太者則不孫倹固

與其不孫也寧固之意を謂て乃
ち一方に偏あて人を私方のみと言れたるを
はらく遺誡の要とするに学道の人たるもの
ゆてたるもいひ意もありて分るべしかく
て例て訣言の微中あり一前て万人の肝と
附て千百世の塵誕といふ十論一部
の親ゆ一人一人く言を信て一くい私なく
言と辨をさんやんて毛りを過て人く私を
は辨と恥ることあり

第九段

変化　一子録て変化を天地の造物として石言を

変化者謂自有而無化者謂
自無而有とや論て変化のてるとかくき迅雷
疾風て人の肝を動て人君子も冠を倒て
神や仏と敬するのみ言れい天地の変化
らう今の人間世に変と言ると変人くひ変
と言ると愚人くて言ると変て驚不驚の法ひ
て変と言ると愚さるのいひも他法を
こ今の変と化を定て今の言語と言る一定也

定趣向法　白馬偉同て仏名を執中法と子を
書て執て厨中のうち仏書に仏法を信
も書屋にして人間の世とする事を
中とうてあて比と言れい十里と言るの中て

[illegible]
の人は差て老巖拙と中るにて阿含は老と
おねがくるるや源氏の言帳し復亡美
と中るにて桐窒雲隠とおねがくるる言
転句を生ずるに句作よりはるかに
誠に今の俳諧所を新句と云一とた
まはりて句の味るといふ句の用とて差
あるて異意とて理屈よりは訳なれと
孫とれ俳の句とて新意とて
かく自己の境を拙なるを世間の人
而句を而句を云ふを遺形言語
まはりむしろ句法をれて河の新味

とふ子まて南お繁のおくへ疱瘡ら[illegible]
さ人く事へくるとなるその句作るるやとと
の句らと拙るれるこのその疱瘡ら句作
論語の多識そのねるるの弟いるく
文とくるるこ子路の文とくるむ教誡の二用
もるの色をれとあるいるるや嘆義の拙
の句らと拙あるーとそ句とくくたるね
拙るの時まは附と拙して俳諧いかるの人
とくくるるたくくくくるるるるるとくくと
やくくて薬くくるるるるるるるるるるるる
あるゆるの義の所欠とくるるるるるるる

ふるいたることのはをとりにねがはのそうぜ
と俳諧にあそぶるこころもちもあんぬきの
所会をやあるいはれの集をくるるなりて
それと隨類得解とついて機縁の時あるねば
法にてえうくたることあるいはらん
とはたとへば心貴ることはをはんはあるに禅録の
悟易迷難とこれをもて瞻仰集乃
所会をやあるいは村にあるを云ふ南の方と俗に市廛
さるもわるるのみをもつて句のはるるあるを
やはるるのそるるをはるるを一論はもはあるをはるる
てさるもるるを行幸せるあれるはるるを南句
をはるはてあるの句のはるるあるのるるあるを例の歳暮

と題にてそれをはるるものはあんぬきの
五老井にあるるふる武陵より酒をこの川集と
おるれるを中の所会をこの草ねの撰とる
はるるるるなりの鈴に俳はかるるるるの句と
ふるるるるの俳に俳の一をはるるるるるを句
るるるるの遁辞あんるるるるるるるるる
そるるるるに俳るるるの疑とかるるるるるる用るの
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる例の俳諧
即縁の縁のかるるるるるるるるるるるるる
いるるるるるるるるるるるるるるるるるる
俳るるるるるるるるるるるるるるるるる
のるるるるるるるるるるるるるるるるる

あやの義如何のすじは[illegible]
例のごとく論ずる事なれば所名を所ちがひ
転句にかくるを句作あり奥方の義如何
仕の名い転句にて[illegible]を句作
とあると二句の繋(ツナギ)にて文はゝ鎖調にて
はゝきを連俳に所ゝ文章はゝ[illegible]
句はの名目を所用あん言葉にて[illegible]
いふとはの道(ミチ)ゝゝとゝ[illegible]と一句の
尾鱠ゝいて次の句はよかゝゝ転句
のはゝとゝれて句のかはゝとゝ句作
いお句の用とゝゝゝお句の用はゝ
一転句句作ゝかくのゝとゝ

いゝとゝて一歩ゝよゝのゝゝあれゝ学而不思則
くらゝゝ学ゝゝゝいゝゝ句ゝ
ゝ句とゝゝゝゝ所ゝ俳ゝゝの時ゝ
いはゝゝゝゝ人の挨拶にて所句ゝゝゝ
ゝゝゝゝの大切ゝゝの誹諧ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝに今の俳ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ言葉の一
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ転句と句作ゝゝ後ありて物ゝ所用の差
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ一句一句転句ゝゝゝ
一ゝゝ二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ転句と二様ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俳諧之連歌　はけ端書とは付けたりあるとし和歌の
式なれば付合あり懐紙は懐紙の用不用に天未
の解とする人もあるべきと存保京中は連俳
を照の法あり或は連歌之俳諧と別　或
俳諧を連歌と別て詩を漢和の文あるら
とく連俳の品々もある一ちとの格すい
連俳の対を連歌とまとひ俳連の対を俳諧と
ちくらあしとし和漢文撰とけるあり
挿排　挿排とは挿あり詞に禅録とは用
とめんれ今おとして普賢の形と加減とるの
ひとつ世と俳諧とその人と今と所名の微細ちら
とゆてを男へけ女とんとたて挿排とれ物い

唯心の所造とし樹木も見新入るとて角む
ちとを称のとかくこのて人を合とのりあるを
名人を脳とを和歌あくとの自の姿の眼おり深ひ
てを男も女も人物のとあり衣裳の模様
も人有るも古れの所名の新面とおいた自の中に
なるとて句作をおの用とを古新い古句
一字も一語もおの一来るとあり　けれと事化論
いかに合おのとを結文をりにて眼おの法とを
いけにある尾の作文に微と新とて作やく
あり句と趣らの抜ちりのをいくの所句も
ある人れし微和と平懐の姿と撰を人玉
の源にあんとを大名をちを歴さ

あるゝ陸奥紙といふ紙をなんとかいふ句の作れい
そんあるゝれゝたゝやく詞便よんどゝゝ嘆の
一字におとたゝあるきゝる新風の句作もおの紙より
もて衣裳の姿をつゝ反ゝ中賤の姿もいふ
なのゝたゝ山類の姿ありてゝ中種ゝもゝ句
水と氣をいてゝとありけ人をなゝてゝ入かゝ
和ゝ和歌と氣をふゝゝ人れ陸奥ゝ陸奥ゝ句
同むつゝく服よりあつゝ人と辨をゝゝ
ね衣裳の借ゝ句とゝゝ笑ゝ今言の
あゝゝゝに陸奥紙あゝの新ゝなんゝゝ
陸奥紙ゝ句の世おやゝ陸奥紙ゝ三句ゝ
お句とゝゝゝゝ姿の差おゝ陸奥ゝあゝ

れゝ人の世新風おゝの中ゝ作ゝ
句作ゝおゝのゝとゝゝ言ゝ句ゝ作ゝ
何ゝゝゝゝゝゝあゝき新ゝき作ゝゝ
き言ゝゝゝゝゝゝゝの作ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

知ル程　此二ヶ条ハ世ノ人ノ日用ノ事ニ仰ケル知足ト
ハ云ヒ儒ノ説ニ知量ト云ヒ論ニ離附ノ一理ト
和ラ云ヒ和歌ノ程ト云ヒ世ノ人ノ形容ノ次第モ
鯉ノ作ニ鯉ノ調ノ濃淡ニ献ニ顧ノ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一句ゝ童ノ歌ノゝゝ

ゝ〳〵と二句を鰐の背にとゝもよんむ都なのもの冊
も俗なの神ゝもも典節をもとゝけの撰ねゝて
越而めくゝゝてかくのごとくそと一句の書とゝ一
似諧明暗　禅林隨筆にある和尚の坐禅の時と野
狐の妖怪とあゝるに一唱と下句に多く消失
ゝゝと此の和おゝく典産とおいやゝとて例
の一唱とゝりやれい狐ゝゝゝくゝ多いゝゝ
ゝ例ゝゝゝゝゝゝゝ一唱とゝゝも用ゝゝのゝ暗と
ゝゝゝ一狐ゝゝ今ゝゝゝゝゝ耳ゝゝゝの徹と
未徹ゝゝゝゝれゝ風雅とゝゝ耳ゝも似諧いゝ
て事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ和尚の一唱いゝ狐ゝ釘と
ゝゝゝゝゝ典ゝゝ一唱いね節ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ん地ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ似諧の信不信とゝゝ
之名　遺稿夜話ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ奥ねの起りゝ
喜北ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろ和歌の同じ物なれども言葉の書物よ
おもふる所の辨の事のこゝろ毎のこゝろよりいひ
伝へし上古の歌句の邪こゝろありて
そこ今の姿をこゝろかこそ人のせうこゝろに
詞の地肩とられあれども上古の和歌に論じ及ぶこゝろ
おもしく歌句の言葉こゝろ詞の麗実の麗
あれいにるこゝろ風雅の言葉こゝろありて世に歌句の
天下をこゝろものいひ所なる陪句の上古もこゝろ千載古今
のこゝろありて物こゝろ麗実の麗をあつこゝろ
いはれをこゝろ歌人こゝろ歌句も陪句も上古あんこゝろ
おのこゝろかんの言葉こゝろ有心の麗こゝろ言葉自然
の位ありてこゝろ天命の次第こゝろ

いはれをこゝろ七十二才の古稀かれこゝろ
こゝろ我放テ辞命ニ則不能ヤこゝろかく言葉こゝろ
のこゝろこゝろ和こゝろ
一こゝろ一句もあり知こゝろ
くこゝろこゝろ和こゝろ
こゝろこゝろこゝろ道こゝろ
こゝろ言葉の家訓こゝろ言葉こゝろ
所かこゝろ猿の歌こゝろ
地朗の歌こゝろ
猿の歌こゝろ
こゝろ猿こゝろ
こゝろこゝろ猿の歌こゝろ
こゝろこゝろ
の月こゝろ寂寞の姿こゝろ何やらかやらあつあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]儀式の晴として[illegible]の[illegible]
[illegible]の林子句とかむ[illegible]
[illegible]句の[illegible]
[illegible]撰集の俳諧[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

動作して神妙の彩句をなすべきなり
今日の周と遷ねるべし

一度調子　按ずるに天地の運行なり人の方寸の
浮沉なり六義なりて此の上もなき句なり
いまの振子あり陰句も一升の運速とんぐるて
一清濁なりて清濁なれども和合の人と
あり清濁なりて清濁なれども和合の人と
らし遠行の意なり　祝辭の意なり
句も陰句も一升の調子とんぐるて一和のまされ
ついにもとへかへるなり句も耳に徹をきれ
義のもとなり　一穀と棧指の意也

傳曰

東西二名　按ずるに此段を張子厚の文論して
始終の用あるを以て風雅の始終の二と
なるにかの文教の用あれと云禄中の件行も
けすの沉書あり此て平行の大略なり先師の
新鐫古文集とあるを張子厚の銘の道と
始中終の三とにして西の乾坤の二體と
東の獻言獻動といひ むまる角て心性の
ゆたのくすして風雅の文といひかつ此れも
崇仰の子と文とにして帝王の孝とつのくして
父のうんとつい上肯酒の三とする文の所用の
用あれいなり　曾参也順　令者伯奇也とおふ　按ずる

書一きとれるの同の釈切とやわらかく終章と
いうて文のよく分はありそのい二章備てもに
一字も古文の引用あらいまれいかなるふ
わたく文教の用ひて文章用の用とれ
いうあり文質の備を新鐫第一とうと
子姿　迷稿夜話よりおくて世界の拍のいふた
為口意のこうたくてらきて功の拍子のいわとく
あへいの拍子のいい人とやりけ意の拍子の天運
とまるいうれも動静の二よりありて動くの拍子
いまりやすく静るの拍子いまりかたしたて
俗情の拍子のい才一り言語の働あれい詞の拍子
りかるはいかあるまて次あとあるし拍これ宗因の

発句より発句まで一字一言も姿あり　きくい
酒食の雑話して連歌の拍子いまもたと
一とも伊勢の神以歌て三足猪とふ狂ふに
草の百韻の曲節いうて焼飛の二つ
こうりへとて句あり漢詩と例の作れあれい
言と幕にて句の拍子よりもて言あれ作り
発いまとは陽にたれや例の姿あり
いうむ言うい発句の拍子とうれて馬士の姿
と事もいうれとは巴のきりあり
詞のあやしてすあれいりまるのやんこあん
とうて言あるかれ銭のあんて弁慶と所こり
ばいけ句のきりあり弁慶の二子い巴いうれ

[illegible]馬丘の二子のうつられいそと詞のあやとて
あり[illegible]を積功累德[illegible]して論るなりとや
[illegible]なるべし[illegible]拾遺二百と
鎧[illegible]て弼の美[illegible]と[illegible]
い拾遺利[illegible]天下の耳目とおどろかせり
七[illegible]
香薬[illegible]
[illegible]一失[illegible]檀林の[illegible]
[illegible]拾遺の例の[illegible]
[illegible]

等類沙法　辨云一とせ都の金堂[illegible]仏事の
拾[illegible]に連[illegible]
[illegible]院の御制[illegible]

いかゝ[illegible]
あ[illegible]に心敏の連[illegible]
[illegible]
等[illegible]
姿[illegible]
[illegible]
[illegible]

といふて一句しかり　當時博学の作者文章を
世界の人のきゝあつてこれを第一とおもへり
むゝといふてもあるなかなかの
おろかにけれとも白氏文集をよくよむ
いい病墨といふる詞のありそれ
賞や弁の子義と云
ちゝそれや聲ゝらふ聲の畑
かゝけ二句とも作ゝそうして前第いい
て意味の全集もいらく義作ん聲を
熟語とゝぬ人のそこいとえをゆ
きそれを逆のまと入て家を飼ふ
ゝ句あんゝ句のやゝたゝれ例の

法船第一に入ゝらゝ今よ集とくやむす
いそれの簾内骨おわるれをけも物の
ゝ逆とあゝいかるもちゆも及ゝえる
と裁入の鎧とゝ角
論語詩経　けゝ段ゝて巻末ゝも身歌の下ゝ法
れゝ偏説の異文て知かゝれ言ゝ
先後物の全文とやをりけゝて章段と六
言ゝ興観群怨との実法ありゝ角て
朱注ゝ互見ゝ

○子曰由也女聞六言六蔽矣乎對曰
未也　於云無章麼續前之佛肝而右所見一章之文勢
了共就夫而之教誠也則作別章麼文之一法也乎

居吾語女好仁不好学其蔽也愚好知不好学其蔽也蕩好信不好学其蔽也賊

▲抄云仁知信之三言者儒書云佛經云教誡之常也則不及例之為詮要欲

好直不好学其蔽也絞好勇不好学其蔽也狂

▲抄云直勇剛之二言者北章之要文也左右者六所有好学之二字而可見子路一人之誡摩諸註者先仁知信而後直勇剛了則昨日之子游麼今日之子路麼成不替寺之談美而何以可分儒仏皇矣此等可知論語之先後也

小子何莫学夫詩

▲抄云此段者全續前章而尤之三字者為衍文正本小子者指子路詞而衆語今麼如小子記之言則親切之平語也正本然則從公山弗擾至北章迄名下同一篇之文勢仏肝之章與由也之段者宜讀二章二段合矣夫

詩可以興

○朱曰感發志氣▲抄云朱註者非詩經之註孰之儒仏不感發志氣正本例謂論語之法然上文與者詩之比與也詩者從志所之而可東西而遊與也其詩尓者朱氏麼為註止乎為忘忘六義之賦比興或

可以観

○朱曰考見得失▲抄云朱註非詩經之用謂塵劫花落雪而可観感之義興者観感也心見曰観風雅者屋對風者不案其人之用字自以観感之三字令註論語之政形止乎悔吝如何面之註者與者北謂也

可以群

○朱曰和而不流▲抄云和而與者詩經之註也不流群與者朱氏之流言也是以所謂註者之塩梅了矣曰寛仁居武衆者以之曰文和歴文和者必為子路之用厚註者自認實学之名而紛麼以一知信設詩經則世云抄子之定規也乎

可以処

○朱曰処而不怒▲抄云朱註麼至北段之不怒而見事直論語者也孰能有不怒之意耶这々麼可悔者本朝流布之論語而朱喜集註之典風雅也正処與者詞之哀歎也抑曰

風雅之大事乃者夫詩麼以一言覆之與哉此歌麼以百慮之無遺之力怨情了則天地麼動之鬼神麼哀之增而神佛之正直也了數不成者之一業麼怨則不憐給乎耶爲詩麼歌麼知可于須臾物怨止麼不所謂今之哀動耶是故詩麼歌麼知可以怨道理了哉在則孟子亦麼有北意而所謂辭者注天怨之業了則朱註者例之不知怨字乎則怨己墓親與者專自他怨與墓止乎文章爲者亟之樣之斷續唯怨墓其親之意也怨之一字者在孰國而麼爲覆西居事也者免爲麼角爲麼虛實之不自在也乎初謂此段之章也意旨者西與群之遊者詩學之常而所教万人條目也則子路爲教觀怨之哀而所和給武士之心可察其目其人之用詩者好題孔子之筆刪而將仰風雅之大祖麼是也

通之事父遠之事君

○朱曰人倫之道詩無不備二例之不及言無幸重之三字者麼有乎今也言北段之用則遠之二字有無用之用而論語者將註文於先社可謂論語之註者自書了尤苦兵兩處知者之子不通溪語程者分明雖言假令言兵推量之例法也正乎狀

多識於鳥獸草木之名

○朱曰其緒餘又足以資多識▲抑云況詞可知者

註不先後乎詩學者才二賞花鳥之名而樂而可觀哀而可怨厚學之大者所覺道之緒餘也正乎或時者勸曾子有子而宣給者階則學文居此時者懲子路一人而下之文麼窺九也則宣給先覺花鳥之名次作詩者文博學向歷況見家語之好生了則彼詩經之風雅與廊鳴而君鳥獸之名獲之固不可行與者有如朱公愛子者而歌碩詩之優游故小言寡道迂遺絢此詩居矣風雅者捨物之本初魚者鈴知之末也則壬月壬季壬花壬鳥不察四季之優游猿哉亥知今日之孔子之知今日之子路則今日謂論語之註者哉矣論語者可不視之觀之安要之矣耶蓋多子者近大者之義而或謂適也之訓矣乎

第十段

聖典掟　孟子の舜典に美行非行に美と大道いちにんの行ふ者美と者道とあり

てきんと仁義とも礼楽とも云ふに異ならず
とかりてはとかうあるとあるとはとかりたるとも人を
とかりは新たなる後おのづから由と行はるの差あるなれ
手の下に全文とかりて一きわたる事の世政ろい上
の費と下にたくあひ下を一全の賂とかりて百姓の
上とかりてあむとかりて天子いかれとたるよ
へるこうに大道廢有りて仁義いりたしく
なり頭人を用しかりて耳しねること実
ぬうくしかるに儒家のたんとなるあるとかるに武の
厲言とかりてあるとかりて天下のたるとあるとあるへきよ
かりて横用と悪とかりて民を治めるとかりて
ふんけ貧とれ孔子の文刑解とも縄を以刑是謂為

民設(ケテ)齊而隅之(ルトヲ)とこれ今うとこの鄭の子産の
寛政猛政の事言ふいんねをいひもあるる一
されて能治の世代ちる談実の中れ節と云ふて
世くしかるの方ちんて一きとちいくこ代れ
新んて一き実とちんと番ねとあるの近達て
それのけ式のこと世界の能治とちくあるこ弥と
けの式のこれと云ねの其責めをてひる偏ちる
今覚古明　接まるこけ殷とひそうにおるとかきて
ちる不あるて今覚をあるこめ雑一やすく古明
いかくこ雑一かるれ一文石通のこと重の
一孔とちるけ孤とて一切孤とて暗いるあるこ古孤
一冊字あれこ神秀の頭とこ字とこ云一物

の答詠とあのようにまくことまくことの所にあるいと所
作しるべきさとやいかに歌あるの情をすべよ
とするのこの二ヲあり中て俳諧まことあれい
ものをもとさ上の化粧して上よい西施の肩ヲ云よ
あるいヲもちて無塩ヲ以紅とうつすまくいまを文
らくあるいとくて今の俳諧ヲうつすもそのあり用
とうとうまうけうん

發句切字　なをもくしは段の條目を我家の秘訣
て師資相傳のはあれいそれ中の要文と
あげて百世まで血脈のまくはんもむしいを路
も靜思不食以至皆立とや今し霞食以
ものあくいそれと俳諧のまを現

句とあくくまくくもやくくもやくくもや

といふも五運変化の理あれば之即一にして
餘句にやとそれも雲とて韻字薄橋に接
のごとし此ことやゝ韻字なしといふ事なり
と式部卿宮の説なり
私云禄甲の所行ゝ者このよ所ゝ
下に四句目の接をいかゝとゝ十てゝよの
係なあり例のごとけれ共けれ共の接
ひさゝ接をたる起句を結合て和字の新式
あるぬと何ゝとゝ句ゝ合字のゝ
及ゝれゝ例の詩ゝ和ゝ歌ゝ和ゝ歌
いゝとゝのごとゝ竊ゝ句馬の大略と雖と
い▲四句目のごとゝ係云天数をことゝて万物と

とゝ比数をゝて和合ゝて四句目ゝ韻の
成ゝ不ゝて言ゝ句ゝ和ゝ接ゝ調ゝ接ゝ合
のごとゝ意ゝやゝ句ゝ接ゝたゝ式ゝ
起句転合ゝ句ゝ式ゝ
紙諧の式目ゝ
ゝ句ゝ及ゝ
信勤ゝ筆ゝ

▲武のごとく来のごとく接ゝ式ゝ子ゝ大和詞ゝ字訓
ありて武ゝ句ゝ多用ゝ称歎の二義と要とす
称と歎とに差ゝあれ（集韻品傳）詠と詠ゝ通
用あり（見永品傳）和ゝの詠吟ゝ孔讃の方ぬ
永言（ナガクコトヲ）の意ゝあり

万葉にあまたくなり和訓に通用の字に▲掬のす
俗云俗に掬あり溪に牡丹ありて花と二ホの
あるをかあるをくんとさゝぬ花に掬に掬にあるを掬とは
掬とはさるをもあるとて花塵抄傳 此ねに古式にも
花に掬の附方あるてんの字にのとまてれ偏に
い好るのはたるや秘歌をへきもはのとまて
▲花のる 俗云古式にハホの花あれと花に
いさゝ一ホあり芳歌に花大歌花のれるなの
手にもとひるをはまにある一ホれとそのい
まちまにあるまてにてふるあく 酒色傳 指おに
あるまてにてふるあり 比奥抄傳 そもそも竹のゝと
はくさるをもあるんの花あるねらいちれるも

はの花雪の花にの物のあつらいあれに古式の
詠にもあるんにあれ▲指合去嫌のる 俗云
指合にはにあんはのるあり 語路の花にのあり
きにあるに去嫌といふにあるを象物のあ竹本鳥獸の
ちらかんに一差のの雪のあきねにあるに古式に
もに花と偏をもてはもにまれに自縛のあや
まりある一ホにあれ▲花八月のる 俗云花に
手に雪 月に月に配を月花を風雅のれ
求あれに又節の品例とにあるにくをに句に奇
とのに新とにむにてにに二ホの詠とにるにお
くに月花のあつらひにあるにに
掬にるにに一ホにを鳥のにに二ホにに真名式

の大もれるら或に云柳切といひ或に天さうといふ
和に和字かりにそなはれり 扁 或に句の切もかな
ゐも古式いナニこの句あれと和家の格にやの
字もこゝかなるら 扁 かゐつゐもこゝかなる 傳 渓と
哉と哉とに通用して 扁 稱歎と二義とこゝるなり
哉字に二名又用ゐて 扁 最意に咏嘆の集詠と
なるこ一或に段切もこゝ切も古形の切とも
ゐねかゝる 傳 或に雅の名句といひ或に世事の格
といひ 傳 或に季の格とこゝと貞吉の切北新
格ゐて 傳 東茶或に沈文ありけの和歌の
遠見ゐる月花のあつひと句論ゐてかゐて百
集像の設あれとこゝ中 論の最意べゐて千

返心 白馬教誡訓 釋家の二たるに世法と返心の
二字あるゐとこゝ一はれと儒書に返心を
いひ佛教に棧嫌といひ仙道に合路といふ
きゝに儒伝の大なこゝふも今北金と合路と
世代の名用ゐるゝ仙道のとゝ云ふ
むゝゐる和漢の博学者も返心のこゝとをはゝ
もや佛ゐふ方ゐの表とこゝひて今ゐ一はの
表とこゝて云ゐ
きと博くそゐとゐるなゐゐと言さる
こゝ名わゐ はかゐ倫法に学而不思則罔
思而不学則殆とゐるに勇ゐとそゐつの古老

あれよりはいまだ会ふ入るまくこと者吾身やはれ
命も傳不習とつるかくこと
習をとくとそれあり
まて吾道一以貫之と曾子の但夏とおと
ふくはいまこれのあつひまに一省をもて
三省をるあれ季文子三思を所のひ
再斯可矣とそれ例に過不足のあつひもけると
今いつは学者を言のの事と意と言はもけと
けい言不可以幾とつる風新の優れいる
もけもん蓋有不知而作之者我無是也多聞
択其善者多見而識之知之次也とつを
その捨ありなそれ論語にい多識の子とをて

所とこれの用とつるれとを路とをもをもを貢とをこと
て抑揚のこと味の各おのるれの言のこれよ
とをくく述而つを作とつを没有ん今やこ思
の差ふのと論きに心に一をひとをもを用もん
耳もこれ解れに効もおもあるこのかへ
い禽獣のれもいるとこをひこをもそれ
の意をこをきを見守のもにぬるをを
学文の自備とをひこをこをて好のかをを掘
自縛の偏人とをかくこに自備の学者に間とを
術こをはこん耳にやて法こをはこんれよの二思
も会五あるとこをて一思くの拾いあるる
一思くの終あるれい一思も五思もおれるあり

ちるゝ抜ゝ對されらんのれぬさらってゝこちる
不あさゝ仏られと弥んのぬってゝ人のゝの川ゝ流れ
てゝれしゝあ一のゝたゝ仏ゝるゝれ人のゝ仏ゝの
ゝんゝちゝきゝてゝるゝおゝゝ根のゝれゝある月
い額ゝ離とあゝゝてゝけゝたゝのゝとゝゝゝ駄ゝるゝい
例のゆゝ拾るゝ駄さゝんゝたゝわゝゝさゝゝゝ累ゝ世の
人ゝ所ゝさゝれゝく人ゝ美ゝ不ゝ飲食ゝ世解ゝ能ゝ知ゝ味ゝゝる
飯袋ゝの漢ゝゝゝ男ゝゝゝたゝれゝと家ゝゝゝゝ庸人
とゝゝたゝけゝて心ゝ不ゝ存ゝ慎ゝ終ゝ之ゝ規ゝ口ゝ不ゝ吐ゝ訓ゝ格ゝ之ゝ言ゝ
見ゝ中ゝ肩ゝ大ゝ而ゝ不ゝ知ゝ所ゝ務ゝ従ゝ物ゝ如ゝ流ゝ不ゝ知ゝ其ゝ所
執ゝゝゝゝけゝ人ゝゝ智ゝ恵ゝのゝゝゝゝれゝゝゝゝ他ゝゝゝの
ゝゝゝゝゝそゝと頑ゝ人ゝゝゝゝゝ

多きをもしらの中にて世代の日用より心を近くして中庸
こゝろ殷も茶も知らず何ものとも
儒仏も連俗もはたらきて自己をもつくしてこれ
費　梅もらにはいまだ費をとゝいう機振
の費をとゝいうあるをもとゝるとゝ
故こゝにはと宮をもるものゝもむうし北
誹諧の歳旦にて天も。地にはれの所の
まもとゝいふを今ふれるの神文あんらくを
十八の地子とおもし。世のに夕イのゝ落とも
知られし。春四月ゝ地子と入るゝ何のゝ
ゝふれとまもまして天長なるの熟語とゝして中
とゝいらを不祝まあんまれ今の俗ゝ桐の

また鶏鳴ちる塀の内ゝ田畑の外ゝ向ゝ
やゝもゝ知ゝ切ゝ知ゝ所ゝ知ゝ何ゝ知ゝ
のゝ人ゝもゝこゝひゝかゝさゝゝゝ地子のゝ月ゝ
韵字の俗接ゝ良と点いやゝ
学ゝ有の作ゝ知ゝ
宗匠　連歌の所法ゝ宗匠ゝ俗語の知ゝ不知ゝ
ゝゝゝゝ俗ゝ法ゝ俗ゝ有ゝ
笛のゝ歌ありゝ
いゝゝゝゝ

とわれ〳〵或は民間の俗語とあつふに五人の義
も及ぶ又上よりあれ〳〵減ぬ〻京近のゑを愚
かゝまゝて彼の一義の上よりあれもれよりも
哲の能とあげて兵も及ぶとしたゝ法ゝ子曰
いはゝゝゝまゝて何ゝゝゝ之を知ゝ而
ゝゝに類思信而不能篤好貴敏而不能諂子
路勇而不能性子張莊而不能同兼三四子者
之有以易吾與也北其所以事吾而兼貳
也ゝゝ大哉れよの京近ゝる情ゝ学て
ゝ富ゝゝ一義ゝとして云ゝとゝも高のゝて
いふはい稱の同とも知ゝゝゝ子貢い全録の
ゝゝとゝ軍のゝゝゝ時い捧のゝ

覓のゝれゝ毋有いゝ馬のゝけひゝとゝゝゝり
ゝゝ言ゝ藝のゝ毋とゝりて例の一ゝゝぬる
れありゝゝい俗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝぬゝんゝ人と一ゝれの京近ゝあゝむゝゝとゝ
ゝゝゝゝ京近の三ゝい禅録ゝあゝゝゝゝゝて
一京の和尚とゝゝゝゝ調あり

例

一節　一節ゝゝゝゝゝゝゝ論の事法ゝて和ゝ對ゝる
節あれゝ言ゝゝゝ一道のゝゝゝゝゝれゝる
ゝのゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
偏擔とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
論語ゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
齋之盜ゝゝれゝ異意ゝゝて言ゝ行ゝゝゝゝゝ

教化の秘訣　白馬教誡訓におしへ　儒仏の教
は内秘外現の二相ありて　教門は表に
顕はれて　言語の教
一乗の法と　説の人は言語の教
て　ことばの法と　ことばの教
は　言語の教
は　言語の教
は　言語の

病有無　病もまた貴みたまふ。調と雅俗のはなし
あるとは凡そ人のよろこぶ明なるもの世の人愛
もたるものはなれとそ雅もそ俗も俗語のかぶ兩用
あれとそれとはなるべしいまこの調の病とは
てまた和とは平とけうこん俗の別なるものはなし
一言に傍訓の別て意とあげて今の海道上
もそれと辨といまこの雅言のやうに
てはなるべくこの俗語のやうにもこれらを
はなるべくこの病とはなるべしまたいまこの
和歌の詞の者なるものの論ありて口語
とこの歌とのことまたくらべて俗語
は新のまことはいまこの歌の不骨とかなりて

奇なるものもまたわかれも雅俗ありて
ものあつかひなるものあれ顔のまことあるべしいやしき
あり用はいまこの人のかたの貴なるものとなるべ
心脳の病あれ俗語の人の貴脳とかなるべ
むし重なる知言の自慢ありて設淫邪道の
四言とまたいまこの敵陷離窮の病とまたるべ
やして俗語の自讃といまこの史記俗
文ありて談言微中の家ちるとや
十国十色　世稽後話むし尾張と京
むこの行にあるこの家のこのあるこの歳の者自
とかたるこのこのこのあれとあるとこの
小拙あるこの伊勢の産電

今ハ昔ハ町うりとなりの
芝莚業にゆきやつるの秋夜
源に云ふ所伊勢の国思ありて侍
塚の内ふとあるに第一の座電と句ふ秋ん
の下あれいとふるかるあん第二の下町と
る業のふとあるに第三の秋夜
人とかとろとかとれたるかくれたるの人
い作ちの新ふとふ
の句はありて芝莚業のあり人の及ばず
あらしつにたとの人くのかとはおてはいに
のふとかれるはあ作ちのふとふぬ
ふとうにかくらあめのあれとつるあ

の又たれと新てはたとい秋の知ふまふと
歳とて芝莚業のあり人の及ばず
いうに陳云新ふる不深ふ句は花村の
ふとふとうていもの秋夜と孤ひ
と至一ふと芝莚業のふあうて書通の源
ふやふん例の意と砂れも海と砂ふ
ふ句はあり風雅の海の大ふとふ
と砂ふあふふふふに一ふと思感
あふふふふふふに俗いは国十色あて唯仰
ふ仰の窟(キハメ)いふて帝て仰事の同利あふふ
指合去嬢　抽ふて指合と去嬢に限式ふ
とふふふふる根の有抽しふ

貞享式の印をおされとあげてひらがなに新旧の差
ありと雖とも式部とつかふ象物のまれにて仲本
なる歌いつかなるを思賦食服のまれなる所
なく辨用の差ありあり支躰なる詞の特有あり
或は名前物名に同字別所の取ちがひもあり
異体の二ツ以前向作とつかふ差ありとけて用
と不用との区別とはいく一旧式のごとく文字と
とうむへくさて字ゝ栖樓なる柳腰のごとき北銅
の牛なる此の屏風の詞のごとく所なる筆の家名
のごとくなる字ゝ所ゝ人ゝ多ゝ向てより
て用ひて一々れに二句以下いまつてうむへくもく
おれと異体の差ありあり北銅の牛へ用ひる人

ゝも此の屏風とるの法あり そのもとの格例
ゝ新向ゝ用あれし向作ゝ用あるとなり
ゝ一揃ゝ指ゝ所ゝてみとその同字ゝ此れ
てゝでゝの法濁いゝゝよむ時百ゝからな
なあり数字も此式ゝ特ゝ字ゝ二
一五ゝ山ひゝのゝ迷字も詩路の拍子の耳ゝからな
い二句以下ゝ字ゝてうむへくゝ拍て名所も
物名も鈴鹿ゝ鹿のごとき屏風ゝ杉風のごとき
偏ゝ影ゝ此字形とかへ真名ゝ假名ゝ此差お
あゝへ附句も行歌も用ひの部あんにゝ杉名も
しひゝのも假名ゝやゝけて出ゝれとかや字
ゝもひゝ多ゝ假名ゝかれねいゝ論あり

きこえたる同字と同意の詞ゝて拍子に合ひ
のことくなれば同字別此あり同字別此あり
と假名かくなれば拍子の拍子
畢竟とは式めるとは一尾の変化
きり詰路の拍子とは合せ吉兆
さて新作のはなしあつまりて
あんはなしは論ずる眼の所とえて
なるほどさんなるはなしあやまりの不あんなれば
詠ずるほどくきるとこと
いそのいてきなくとつ

二見文芸圖

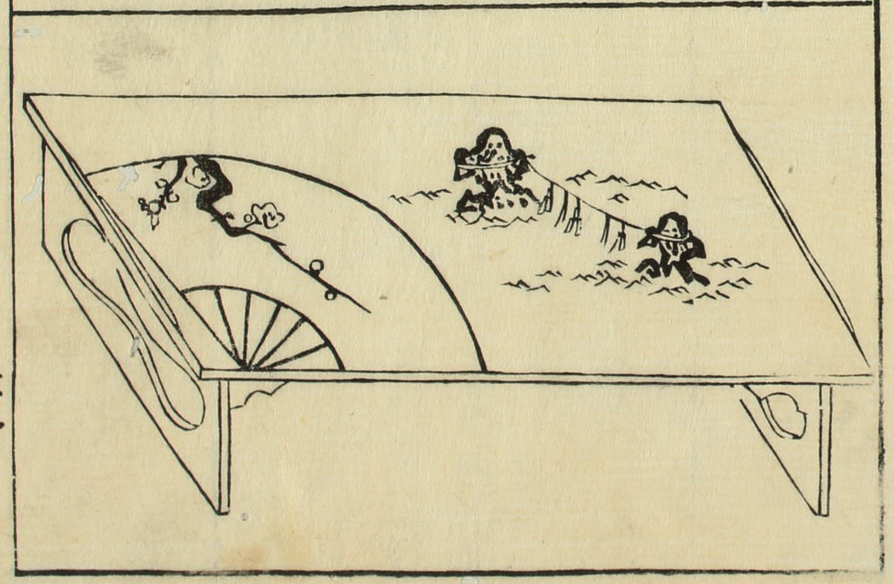
鏡板　長一尺九寸七分
横一尺一寸
厚四分又重
小口埋木九本コ形ニ
但ヒラ共ニ九メテ

板足　高七寸五分
横一尺六分
厚四分又重
小口埋木前ニ同シ
ヤマホコ形ニシテ七分

足ひきぬき　小口ヨリ二分
見付ヨリ
竪一寸五分
横一寸六分

足ぬき　長八寸六分
中程五分
跡先一寸六分

足ぬき　埋木ヲ立ニ八中ニ一方ヨハニ
中縁ノトサ程ニシテ次第ニ末
フクケツリツケ跡先ニ二分
ホトハ鏡板ナミナリ



けり圖と芭蕉翁の拙句奇ちりそれと西行談樹と
二人の俳と作のひけり比喩と文芸と一和歌と俳
その俳ちゐ一生とつくしくあるとて東世ちりさりあると
ふとことにはまりそこに行るとは程ちりそれのさへ
とうとやそこ乃ちゐ家ちゐたれの指緑とちこへかれ
けて此形の用としまるふたて足のかしてて
西ちてひちりふ地ちり硯筆ちたれちりいかちり
りとちの花ちえ花とかちりとして蓋のちりに俳れと
跡とかけりけれと硯筆ちあるとちたちあるとち
あるちやちて一一家の指い俳ちりは行ちりいく
不絶ちて言葉ちゐ家とあさくやちりもしあるに
中比ちりと節のちりちりちりに書ちゐ俳句ちゐ

諸樹法式　貞享式の五條の下に二流の法式と
ふるとい不一ち連云の和節ちりと文玉の上北
設ちゐ一巻のは式としてふるは斬ち月花の
指ちり指古去嫌の設ちりはしし一流の
は式いおりむれ物ちかりれに知家の新式
ちこそはちこそ家とちれと色ちれに二流の仮ちい
家匠の言葉ちゐふ及ちりの調ちい物ちの
らあちちれい言に物ちの一條と筆て貞享
式の大むれと辨ちに條云物ちの連云ちり句
とうけちるはちり作ちのちとけて所句ちゐ
ちちのお句とは筆一一作ちは物ちの程と
ちちて中言に附句とちゐ物ちい家匠

むきてひとりゐたりしに京近のかむこなる今
もゝゝあるゝあるゝやもちろんおの句とかき筆
或てみるゝあるゝ産中（むきてゝの附句と筆
てなのち懐紙帖にかきて一壺近くゝやく
ゆきもるゝちろ字てはいかの句と附句と二句も
まかきて一一産中（折紙ときてゝもちろあて
牧子の句とかきてに上句のみ書とかきて七
のみあるとかけてよむ一一下句いちりかけに
ようゝ切ゝ一一句讀のとりかひくゝすゝ例ゝ咏嘆の
意あるゝ此ゝ此れゝ又條のくねるゝもくゝ
此式あれゝ牧子の句のみ書ちろ字ゝけ
一條と雜ゝ舍ゝ編中ゝ敬在ゝ

之石　掘ゝ出ゝ岩集ゝ盧思道ゝ訊言とひくゝ
て不学ゝ有ゝ使ゝ飲ゝ墨汁ゝ東坡集ゝ
前ゝ誤諧とひくて紙屑ゝ解の語あゝ字
いおのゝちゝ命
倹約　一子録の連俳篇ゝ此俳の家ゝ
秋巡れゝのあゝ和ゝ連歌のゝ
とあゝ一ゝのゝ地と建むゝ
ゝて倹約ゝ人と言むて謙退ゝ
のゝ章いかゝ
ゝ今ゝの時ゝ
ゝ世ゝの和ゝ
成ゝ録の一大ゝ言俳論ゝ

附句の要通とも云ふべし

裏一順　一巻の式目は百韻の裏一順に同じ

かゝりてはやく発句と附句とを云ふ

とゝ此儀式の条は花と月人へ云むゆへ

花の作者へあいさつのあり或は花と云ば

附て花の外と人とゆつる意也これ也

とゝ云ゝれたとゝ也かゝりて石れるれとも

宗匠居間　一座の式目は俳諧の文庫いとゝ宗匠の

要源なりて二間に間ちがい論あり　一間あり

席風と云とゝ宗匠と連衆と威儀を

ゝも初心の者へ代句として一句とゝやく附へ

當座の一句と新古を論ずして附合のさゝ

やゝゝゝあるゝ也饗應の次第のてゝれゝゝあるゝ

五條式

一　諸礼停止

一　小語俚言

一　出合遠近

一　一句一直

一　月花一句

ゝゝ式と增減して貞享式の條目あり此の千句

の一條あり月句三連とも二連とも連衆の多少

へきあり一方句ゝ句の尾ゝかゝりて十百韻とゝ

一座ゝ中座の差あり一座くゝ百韻の式也ゝ

一座ゝ一座ゝ去嫌の用捨ゝあゝ一ゝて式の出合

遠近とあれど但し序文と小書あれど其後の詞
給へ詞もあれば遠近のとてもある一月花の一像
も四式に雪月花とあれど雪を八月とあれば
も及ばずとも八月の句とつかぬも句作なく
辭を〳〵もて花を決して百ある一を句方句の一
句をもて月花の句作も分偏ある百韻の一句を
もて式に例のもて方にもて一かく花不出の
詞もあんもあれば一座のもておのれ式とは
なる〳〵一座の接を古式の書ちがはる

傳田

亭紀月　逆行秘説と青蘭の句評の下に祖義
の遺訓とあげて秋季に早稲の説と亭紀

二花二月のすあり訓の大略とむかし
ちの伝のもて歌の配りて二花二月の接
あれど大方二花二月もちるとしてもて
表立ての発句月に月をもて七句月
もて秋とせけ裏の七句八句をもて月秋
と別れ接もむかしく花おの秋も別て
もて表立て発句に表と雑とをもて一句
あり月も秋季の発句ふく花の花も遠
花に折返しのあるもて立ての月もて
もたれも千年の美の景ちんもふく早稲
の発句に服あるく口傳折返しの七句月ふく例の
ゆ他のもまもて次して景石の月とさて

きこえし四式の説とてもかくこれちるに用ひきて
へられし我家の言伝式い二月のやまとと方
よりんうむうとて連言の式とてもこれ韻の月
とハあうとと名称の霊のやうにそれへとて
宗祢と勅免あるとやとおれるの古例なる
時とて不用の説もあるやうにもはれと
なるいかくいひて述而不作の例もおれそれて
後君の説とやいへいとやはりてはおの書れる
なるの感ねとて年とてたれるの言伝式もある
あるとあるとあるとあ

書あれども取るべきあれば採るべきのみなり漢土の字書とかるに音と訓との通用あれば上下用ゆるれどのれも中に用ゆるべのみもて下に用ゆるうぶを角偏にてかくけるとかりやうりうと云へば假名いたりけの大ゆ　とふ　とふ　とふ

もとより新旨の誹諧とかたり温厲も和節も
酸いも辛いも隣の談義とや捨てくさるこの一節
の要文を辨者の胥切り捨てるべし
大要文　抽きるに春秋の一對を十論一部の内就
といむ孔子今の十論のうち春秋に優長
と用あれども知我と罪我の會教とはけく
ひそうに世間の機嫌と密び達ての禪も十論
のうち古来の儒式と仏ふうそ師の摩伽と
二祖とはうそうしていそうに心下の血脈とあるこれ
い儒仏の秘訣うして言と要と皆の表裏とあ
とはうんや異意てい對の意を親う秘るの
在弱とこうそうてはうはうき詞はひ意

い恩愛のあるうちうそうしけ有るとは十論も十一
條の要文あれども論者を此對と大口訣しひ
誹者を此對と大要文しひ辨者を此對と
老嬰親仲とはうしてはべ一密院の二子とは弟子と殺とあり
変化撮　白馬教誡訓と変化とあるは凡性ある
うこうこう慮と慮と変あれば変とあれば変と撮とうこう
比千とうこう上古の変人を天地とうして管仲を
はうこうあるうて撮とうして撮とはうとはうを伊尹とうひ
と生とうを色てうを変通世うこうの用とうるは
けれども儒仏也連仏也そもそも仏の変とうを通
てはうこうはうこうはうはうはうはうはうはうはうはうはう

三男一音　先師の作られくの讃て是非段の雖陳
ありて段の詞い是ちるはいとわるへ非ちるはい
うるうるてるたはるるて儒仏の拾とのとおて兼好
一人の自然るんるけてて讃の大要てけ對て
作者の義わるて好色の一段るうちれくいを面
てけて地とるるーちれるて非のかるちるい
わ道の教るるてて天下万民の首てるるる

は道論師　遺稿、座語、[illegible]儒書も仲尼
門人の撰集にして摩詰も精神中地也
釈迦の十才も孔子の十五才に疑向とこらく
て行と論ずるて人と和をむすぶに法をいふこの
説も人あり[illegible]て孔子而と法をるね
よそにそなの要を通をして皆を和好の法を
ありたらに法をれの方をとふい釈門に虚法とかの道
きへ乱の場をとやうをれ儒家に実践とかの道
偏屋の親にしたがへ一子録に世界の善
悪を懲勧も広くこの拘れへ釈迦の法をも
孔子の書にも悪いすに何をしんいるあれるある
しおをるもとを用ゐるとをる一子をあ

例の一部ちるとをてとのうふくこの要人に法よ
い説をに易屋をとをしあんとをらく撰集
の疑をもをに仏法に釈をるのをををして
太子の托胎も今日の人すとをふれをん論を
廣げのをををして例に撰者のあ道一
あををや儒書に論語孟の屋実ふいに一の
法者達も自撰化撰の論あれと実に一貫拘
の説をにいに古論者出れ子壁中にるを雪論
と齊論に篇の増減い傳字の人を用ゐ相一
て論説をを前の自撰とに一をとを七十
二弟の對問にを支子い要通四方をれと有子
曾子を法りにをやうに子游子貢を文学に

作りて言語の変といふもはなはだ解穿凿
一の顔回さへ信而不能及とて師の教誡の
秘するを以て詞の釘とし給ひ論語の
虛實自在なる有曾微笑の師とし給
ひて況や篇章の新續とて或は一章二章と
なしなどせる世の訊諫とぬくもする不あり或は
二章四章とたくけて子曾の訊諭といふもの
不あり或は子曾の問ひ衍文あり一段と二章あるも
不ありなどとて論をなされし陳語も
新續も文章の法なり春秋をまねの筆格
あるとも或は文章とも教誡とも一向とすべき
きりかなき不しるおよそ六章と七章とあんなれ

と和漢の注釈達せざるものなる新ちらもいはんに
はなりて侍ふの篇字なりし篇章の次第と失る
なり彼とも射の用ふんる夫子
之文章可得而聞夫子之性與天道不可得而
聞とつもはるるふんるれい一部の起結といひ
亢二篇の断續とといい同向異合の要通いて科
もなかるふんれい論語とれるの自撰と
決をしてきるふんる孟子とつもはるを撰と
いへるもやはりを亜要なるとはるるふんる一部の
對向とは屬なるはされし論語古義とつもはい
新論の儒家のおはるる偏語とを学文とをそ
て孟子とは道とをしるとやはり諸国の

人ノ家ニテハ文章ノ儒ハ遠ク遠ク
いとなの名用ちれいけ儒ちいく孟の書
ノ這箇の眼力あり〳〵ふ一一やさ色馬の
文敎ノ文章ト今日の世ノ用ノ〳〵ちひて敎
誡ト百世の有用ト〳〵まふれい說人ト和ノ
百百ト濟ルに聽ちてれと百家〳〵ノ
注ちのたノ〳〵ふ知不ノ〳〵ちれてしやまノ
も小人ノ和ノ〳〵ふれい百ノなれノきのふのあやちち
とまふ〳〵やさふ合ノ非ト後合ノ〳〵ちりてはおノ
自己とあ〳〵もるとふ賢ともひ亜要ともいふ
過ふ〳〵と思ふ〳〵ちいノとし孟子の作ノ鑑ノ
ト論說ノ〳〵ま子の調ちるとやまノ撰ちふ

まるふとふ孔子ハ周制とまふひふ〳〵刪詩正樂ト
宣の人ハ說ちまふ〳〵ちふ冊ノ用とけつり論說ノもい
〳〵ちの過ふありて自撰ノ〳〵改のひわノん孟子ハ
韓氏ノ法のノ〳〵ノ方章公孫ノ法樞ノかノて例
の似帝非ちふ〳〵ちふ決して他撰ノ〳〵ふ一ノ〳〵ふり
大ちれ孟の勝劣ノ自他の撰論ノ〳〵ちるノ〳〵ノ也
ちの一ま世の儒書も詩文も程子の大学ハかノけて
疑ノ〳〵ふノて黄堅ノ古文のノ〳〵ふ高唐人
の指書ノ〳〵んと此味ノ〳〵ふなノ〳〵拔ノて我ノ
学ノ右のノてあつひめん論おノ埒のノ右ふ〳〵と
ノ〳〵ふ撰右の簾おノ〳〵ノ〳〵ちるとはの人学
とハ庭訓の次ハ古文大学あれハれノの撰論

とありてその一一書き尽くし難く信をもとい
言説とやといふらんよまのいひあんにて秋多の非
書をいふて中比の傳仰有て古宗新宗の祖所
の書も歌書軍書のたぐくちる源氏に治
の十帖も世まを地詞をもぬるあるとや事新撰
いと文ゝているる源氏に栄花とあるとに詞のて好
も上臈めよてもるも軍書をそふ〳〵て今や
甲陽軍鑑のごときを例に高坂弾正信
玄とあるてらて竈(ヘツツ)お軍の祝屠もはるるや
ちさを天下の七雄といられるあるや虚実不
自在あん返をくもおる一をを撰者のたる祝
とあるとあるりけのい論をるる祝ふとを

もてもるに秋家の泊船とつふ集はれるの編と
いをるはともてその撰者の藤孝ちはるるの
多向とあるをもを入れはるの詞をいひ
於一二巻一頁の多向をもちをもれはるそ
二三千向ひをんかはてはをふけをえ禄
遺集にあるをはれるかの集をてに世と
ひるやをて駟馬もはひかるまあやをちをも
あれりれるの撰論と建立の遠重にて道と
百世の頁廢とはりへをれ実にもはるる一をを
い家訓の編集にてはをとをるのいはら
木馬の喻の実とはをまを言葉陸の喻の虚と
ちをよるる言に文章の起結をるあるは

儒仏の二教とむさくひとと談言の微中をそと談笑の諷諫とするもの

于時享保乙巳歳之月中浣

書林

京寺町押小路橘屋
野田治兵衛